

2011年2月17日18日、市議会新病院特別委員会では兵庫県西脇市と三木市を訪問し視察研修を行いました。その内容を報告します。

兵庫県西脇市

兵庫県のほぼ中央に位置。人口4万3983人、面積132km²。

西脇市立西脇病院



病院正面から

昭和26年開設以来北播磨地域の拠点病院としての役割を果たしてきた。平成16年より4期にわたる工事を行い、平成21年11月にグランドオープンした。鉄骨造地上6階建て、免震構造で総工費は150億円かかった。

診療科は18科、病床数は320床、医師数は現在39名である。

患者のアメニティの向上対策について

個室と4床室のすべてにトイレと洗面台を設置した。また4床室のベットサイドそれぞれに窓を配置するなど配慮されている。また病院入り口のロビーにエントランスホールを設け、市民ギャラリーや市民コンサートの場に活用されている。



市民ギャラリーとして利用されているエン

トランスホール

地域との連携し、地域医療を守る活動を展開

医師会は、「病院内に急患センター」を設置。休日の診療に交代であたっている。また住民と一体になって地域医療を守るための「地域医療検討会」を開催し、「プロジェクトN」など各種事業を提案している。

「**西脇小児医療を守る会**」は小児科医が一人になり入院診療ができなくなったことに危機感を持ち小児科を守るため子育て真っ最中の母親たちが立ち上げた。署名活動に取り組み市の人口より多い6万5千筆も集めた。また適正受診を啓発する冊子を作成したり、学習会を開催している。マスコミにも取り上げられ大きな反響を呼び、結果新しい小児科医を招くことができた。

市商業連合会は、プレミアム付き商品券を発行。その収益で基金を創設し、研修医の着任時に一人当たり現金5万円を贈っている。

病院も勤務医師が講師となって医療セミナーを開催したり病院フェスタを開催。準備には職員が市民と一緒にボランティアで参加、2500人も集めている。

感想・参考となった点

患者に配慮し、電子カルテシステムを導入し、院内の連携を図るとともに、案内表示も番号で行なうなどプライバシーにも配慮している点や、若干建設費は高目となったとのことだが各病室にトイレを設置する設計をプロポーザルでアイデアを出させたなどアメニティに配慮した設計となっていることなどは参考となった。また、地域をあげて「病院は宝」との認識で病院・地域医療を守る運動の展開は、市民の意識改革としても必要と感じた。

北播磨総合医療センター

三木市 兵庫県中南部に位置。人口8万4361人、面積176km²。

小野市 兵庫県播磨平野のほぼ中央部に位置。人口4万9761人、面積92km²。

三木市民病院は昭和30年11月開設で許可病床数は323床。診療科目は18科、特徴として急性心筋梗塞の急性期拠点病院となっている。現行の建物は西館が築後35年経過、東館が27年経過し老朽化している。**小野市民病院**は昭和36年開設で許可病床数は220床。診療科目は15科で小児科の拠点病院、糖尿病の専門病院となっている。建物は築後25年が経過している。

両病院とも、医師・看護師不足、周産期医療の休止、患者減による経営悪化、医師不足による救急体制の縮小などの問題を抱えている。

両市民病院統合計画策定までの経過について

平成19年11月、北播磨圏域に医師を派遣してきた神戸大学より医療資源を集中化し医療提供体制をみなおして医師・患者に魅力のあるマグネットホスピタルにすべきとの提案があった。

管内には5つの公立病院があるが、小野市と三木市が受け入れる医師を表明した。その後協議会を設置し1年間をかけ協議を行い、平成20年11月に統合病院の建設に合意した。

平成21年5月に北播磨統合医療センター企業団を立ち上げ、12月に基本構想を策定、平成22年9月には建設基本計画を策定し、建設用地9haも確保し現在造成中である。

統合新病院の概要について

地上7階建て、建設事業費を200億円と見込んでいます。総病床数450床（緩和ケア20床、人間ドック5床含む）、診療科目27診療科。建設予定地は両病院のほぼ中間地点に位置し小野市内となります。負担割合は両市とも2分の1ずつで合意しています。

今後のスケジュールは、今年10月頃より建物建設工事に入り平成25年5月に完成を予定。

移転作業の後10月オープンを予定しています。

感想・参考となった点

建設位置や負担割合の協議は対立もなく順調に進んだことは、両市の配慮もさることながら、建設場所をほぼ中央部に確保できたことが大きいと思われます。また、医師を派遣してきたのが神戸大学ひとつであることと、両病院それぞれに特色がありそれぞれの強みを活かした統合が可能であることなどがあげられます。

今後の課題として一番に医師確保をあげています。病院を統合してすぐ充足するわけではなく今後とも地道な努力がひつようであること。病院へのアクセスを確保する必要性や、病院経営には専門家である医師がトップに立ち、職員も病院専門職員となって経営に責任を持つことなどをあげられました。北播磨総合医療センターでは最初から地方公営企業法を全部適用する一部事務組合＝「企業団」を選択し、すでに認可をうけています。

病院経営の見通しでは、病床利用率85%、平均在院日数14日余と掛川・袋井新病院よりずっと低く積算しています。開院後も両市で毎年12億程度繰り入れをおこなうなど甘い見通しは持っていないようです。

また、両病院とも建物のあと利用を検討中だそうで、介護施設や医療施設として民間事業者への働きかけを行なっています。

掛川市・袋井市の病院統合と同様に、自治体病院同士の統合・新病院建設の全国初めての事例として注目されています。お互いに情報を交換し、学びながら順調な運営で地域医療の中核を担っていくよう取組みを進める必要を再確認しました。



企業団事務局がおかれている三木市民病院